# 雑木林だより

第10号（２０１８年9月発行）

編集・発行：ＮＰＯ法人北本雑木林の会広報部

連絡先：０８０－５６９７－６２４１

北本雑木林　検索

## 縄文から続く北本の雑木林
### ～縄文ブームとデーノタメ遺跡～

**なぜ今縄文？**

近頃、縄文ブームが起こっているのをご存知でしょうか？そんな話聞いたことないぞという人もいるかもしれませんが、そのブームはじわじわと広がりを見せているようです。

その1つに、大阪万博記念公園の『太陽の塔』の再生プロジェクトがあります。１９７０年に開催された大阪万博の象徴ともいえるあの塔は、実は縄文回帰を訴えているのです。製作者の岡本太郎が言わんとするところは「科学技術と資本主義一辺倒で豊かさを追い求めてなんとかなる時代は、そのうち行き詰まるぞ、進歩と調和などといっていて未来が拓ける時代は早晩終わりを告げ、本当に人間が生き生きと輝くにはどうすればいいか、根本から見直さなくてはならない時がくる。そのとき何を信じるか。それは『縄文』だ、今こそ縄文を取り戻すべきなのだ。」そのような意味を込めて、あの太陽の塔『縄文の怪物』を突き刺したのだそうです。岡本太郎は、日本人として最初に縄文・火焔土器の美しさに気づき、その生きる力強さ、精神性の高さを訴えました。

弥生以降の実用性・効率優先の『面白みに欠ける』時代よりも、八百万の神が宿る時代の方が『高い』としたのです。

縄文火焔土器

**北本のデーノタメ遺跡**

私たちの住む北本市にも奇跡的に残った縄文遺跡があります。縄文中期から後期のデーノタメ遺跡です。この貴重な遺跡が道路建設によって記録遺跡になる可能性も浮上しています。５０００年前の遺跡の上を道路が通ることになるかもしれません。５０００年前といえばあのエジプトのピラミッドよりも先の時代です。国定史跡になりうる遺跡を保存しどうすれば後世にバトンできるのか、一市民なりに頭を捻っているときに出合ったのが、この岡本太郎の言葉でした。目からウロコとはこのことでしょう。「えっ！まさか縄文！?」最初はそんな気持ちになりました。

しかし、ここ１０年以内にも、東日本大震災にはじまり立て続けに日本列島を襲った地震や台風、豪雨などの自然災害を考えてみれば分かります。自然現象を前に私たち人間は何ができたのでしょう。そして何をすればいいのしょう。人間が造り上げるものには限界がある。自然を尊び生き抜く力を養うこと。現代からすればシンプルすぎる縄文の生き方にヒントがあるのだと思いました。

**北本市の未来**

今年２月、雑木林の会では、北本市役所の出前講座でデーノタメ遺跡を見学する機会に恵まれました。普段は遠くから眺めるだけだったあの鬱蒼とした雑木林の中には、異なる時間の流れがありました。北本の雑木林が守ってくれた遺跡です。足元に転がる遺跡の破片を手にとった時には、何ともいえない高揚感が抑えられませんでした。５０００年前の人々の痕跡が、時を超えて自分の手の中にあるのですから。そばにいた子どもの興奮した顔が忘れられません。５０００年の歴史の重みは子どもの方が素直に感じることができるようです。現代の私たちはとかく日々の忙しさに埋没され、遠い時代の人々の生活に思いを馳せることなどありません。日々の生活とはいつの時代もそういうものなのかもしれません。しかし、この殺伐とした世の中を生き抜く子どもたちには、さまざまな価値観に触れ、感じ、考える、そんな感性を養う機会がほしい。その資料がこんなにも身近に存在するのですから。

今年に入ってからの北本市南部の住宅建設ラッシュには驚くばかりです。新たに北本市民となった方々はどのようなまちに住みたいと願っているのでしょうか。今ある住みやすさを見つめ直し、まちづくり条例も視野に入れたような未来を見据えた北本市の全体構想（グランドデザイン）を考える機会がほしいものです。子育て世代の一人の母親としての率直な願いです。

デーノタメの森を歩く

参考資料：PRESIDENT Online岡本太郎が「太陽の塔」を突き刺した真意「進歩と調和の体現」ではなかった
NHKエンタープライズ　エグゼクティプロデューサー　井上　恭介
https://president.jp/articles/-/24705

**デーノタメ遺跡情報**

関係者の話によると、デーノタメ遺跡が、国定史跡に指定されるかどうかは9月末までに結論が出るようです。

## 秋の野の花

9月に入ると、雑木林には可愛い花々が咲いて、秋の訪れを告げます。中央緑地や市民緑地を歩いてかわいい花たちを探してみましょう。

**ツルボ（ユリ科）**

一面の草むらの中、うすいピンク色の花が穂状に沢山咲いています。よく見るとあっちにもこっちにも。葉っぱは線形で根元から2本伸びていますが、花穂に比べて短く目立ちません。雑木林では突然現れるのでみなさん不思議に思われるかもしれません。

**ノハラアザミ（キク科）**

花の色は濃いピンク色で上を向いて咲きます。葉には鋭いトゲがあります。アゲハチョウやハチなどがよく蜜を吸いに訪れます。

**ヌスビトハギ（マメ科）**

物騒な名前だけれど、花はハギの花を小さくしたような、２～３ミリのうすいピンク色の可愛い花をたくさん咲かせます。名前の由来は、実を見るとそれが盗人の足あとに似ているからだという説があります。雑木林では草刈りされてしまう花ですが、たまにお目にかかれたら、かわいい花を愛でてください。

**オトコエシ（オミナエシ科）**

秋の七草の一つオミナエシ（女郎花）は有名ですが、こちらはオトコエシ（男郎花）といいます。名前のように堂々としていて2メートルを越えるものもあります。白色の花は清潔感があり、例えるなら美青年のイメージでしょうか。

# 幼児期の学びと森林

国土緑化推進機構発行「ぐりーん・もあVol82」の特集「幼児期の学びと森林」の記事は、一昨年より森と子育てのつどい（通称、モリトコ）を開催しているわたしたち雑木林の会だけでなく市民にとっても大変興味深い内容であると思うので2回にわたって掲載します。

〈以下引用・一部抜粋〉

幼児にとって森林や自然での体験が大切なことは、感覚的には誰もが頷けることだろう。しかし、なぜそうなのかを理屈で考えることは、案外ないのではないだろうか。ここでは、幼児の学びの環境として森林や自然の中がふさわしい理由と豊かな環境の要素について専門家の高山静子氏に説明していただく。

「私は、幼児にとっての豊かな環境のことを“要するに森林のような環境がいいんです”と説明しています」つまり森林には次の要素があるのです。

## ①応答性

「例えば水たまりにそっと入ればピチャッ、勢いよく入ればバシャッとなるわけで、それが遊びになり体験になります。木を押して揺らしてみたりするのもそうですね。自然物はそうした子どもの行為に正確に応答してくれますが、人工物は、そのように応答してくれないものが多いのです」

## ②多様性

「子供たちはそれぞれ、様々な興味関心を持っていますが、保育室の中だけでは、例えばブロックと折り紙とままごと遊びくらいしか選べません。野外でも、ただの広い運動場では走り回るだけしかできません。しかし森林のような環境であれば、走りたい、木に登りたい、虫を捕まえたいといった多様な興味関心を全部受け止めてくれます。ですから森林の中では子供たちは飽きることがないのです。逆に言えば、森林には多様性があるから、その中からどんな子どもでも興味関心があることを選べるということでもあります。」

モリトコの子どもたち

## ③見立てやすさ（想像や創造のしやすさ）

「子どもたちは1才半から3才のころに、目の前のものを別のものに想像する力を獲得します。そして子どもは、例えば落ち葉や土などの”何かに見立てられる素材”に“想像力・思考力”を加えることで遊びを作り出します。そうした力を発達させることで、やがて人の気持ちを理解したり、学んだことを応用していく力につながっていくのです。一方で市販のおもちゃは完成されているものが多く、想像力を発揮して遊びを作り出すことが難しいので、すぐ飽きてしまうのです。」

## ④挑戦

「子どもが持っている能力よりちょっと挑戦的な環境を与えることが発達にとって大切だといわれていますが、能力には差がありますから、全ての子にとって挑戦的な環境を人工的につくるのは複雑すぎます。しかし、森林のような環境であれば、運動能力の弱い子はちょっとした段差を登るだけでも挑戦ですし、運動能力が高い子は木に登ることもできるわけです。その複雑さは、本当にすごいと感じます。そうした挑戦は危険が伴うのも事実で、だからこそ保育者にとってはハラハラしてしまうのですが、より複雑な環境であれば、子どもたちは“これは無理だ。これなら出来る”と自己判断をして挑戦することができるのもポイントです。

モリトコで人気の丸太の遊具

## ⑤適度な刺激量（色・音・臭等）

森林は、色彩にしてもかたちにしても、お互いに調和し合っている世界です。人間は、例えば自然の色彩の中に赤い屋根の家があるといった、秩序観がある調和の中に僅かな新奇性があると、それを美しいと感じるのだそうです。森林は、そんなふうに適度に五感を刺激してくれる環境なのです。」と説明しています。乳幼児と一緒に森林や自然の中に遊びに行ったことがある人ならば、その時の子どもの目の輝きや、いつまでもなにかに夢中になっている様子を目の当たりにしたことがあるだろう。大人からみれば、「なにが楽しいんだろう」と思ってしまうこともあるが、その理由は、森林がこれらの幼児の学び＝遊びにふさわしい要素にあふれていたからなのだ。

# 今年の草刈り事情

とにかく日本中で、猛暑酷暑の記録がたくさん更新された夏でした。草刈り作業は暑さとの戦い、熱中症との戦い、伸び放題の草との戦いでした。草は暑さに強いのです。特に日の当たる炎天下ほどたくましく成長します。

市民緑地4号は、近隣民家との間を大きく伐り開いたので草原状態になっています。とても日当たりのよい草原の草たちは、伸び放題、思い切り成長できます。草原は虫の楽園ですから、虫もたくさん住んでいます。中には、民家にお邪魔したり引っ越したりしている虫たちもいます。

一方、林の中は木々に遮られ根元まで日の光がさんさんと降り注ぐ事はありません。ですから、下草の伸びは余程抑えられます。それで夏の草刈り作業がぐっと楽になります。純天然の巨大緑のカーテンです。

確かに、この夏のものすごい草、秋冬の落ち葉、春のおびただしい落花などは厄介者です。でも、そうした雑木林のメリット、デメリットをより多くの人に知っていただくことが大切です。どのように伝えていくか、みんなで工夫していきましょう。

市民緑地4号の様子

# 記録をつけよう

北本では夏になるとニイニイゼミ、ヒグラシ、アブラゼミ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシが鳴く。それに最近ではクマゼミが加わるようになった。セミのオスは鳴くので、その出現がよくわかる。それではいつ鳴き出すのか。いつ鳴き声が聞かれなくなるのか。皆さんは答えられるだろうか。

この問いに答えられるようにしてもらいたい。それには記録をつけることだ。記録は大切で発展の源である。手帖にいつどこで鳴いたかメモしてほしい。ふだん日記をつけている方でも、ぜひ別のノートで自然の記録をつけてほしい。セミだけではない。花が咲いた。鳥の声を聞いた。そんな自然の記録をノートに記していただきたい。

毎日毎日つける。すると、いつから鳴かなくなったかも、はっきりいい切ることができる。それを年ごとに重ねると、自然への理解はより深くなる。

セミは卵からふ化して土中にもぐり、十分成長すると、地上に出てきて脱皮し、成虫つまり親になる。地中で何年過ごすかはわかっていない。三年とも四年とも、あるいは食いつく樹種によっても違ってくる。

それが親になると二週間ほどで命を落とす。鳴き終わりを終鳴日という。それぞれのセミの終鳴日をぜひ確かめよう。今年の終鳴日にはまだ間に合うだろう。

牧林　功

シャンシャンシャンと鳴くクマゼミ

# モリトコだより

今年は暑い日が多かったですね。

モリトコが行われている「てづくりの森」（市民緑地4号林）は、木々や土のおかげか風も抜け、強い日差しも葉っぱが遮ってくれるので、とても過ごしやすいです。

この夏は、井戸の水を汲み上げて川を作ったり、地面に深い穴を掘ってみたり、ベーゴマ、スラックライン（ベルト状のラインの上を歩いたり飛んだりする綱渡りスポーツ）、木工など、子供たちのみならず大人も一緒になって楽しんでいました。

この春からモリトコでは、プレーリーダーのひらりさんが来てくれています。一緒に遊んでくれる面白いお兄さんです。

秋は落ち葉に焼き芋に♪とても楽しい季節です。ぜひ遊びに来て下さいね！